

日 時：2016年5月21日（土）～5月22日（日）

場 所：福島県南相馬市

参加人数：26名

## 1. 活動参加にあたって

私は、2006年からの大学と大学院生活の6年間仙台に住んでいて、2011年3月11日の震災は仙台市内で被災しました。自宅の被害はほとんど無かったのですが、大学が5月まで閉鎖されたことから地元札幌に帰って就職活動を始め、縁があってJTB北海道に入社することになりました。東日本大震災は私の人生を大きく変えた出来事でした。

JTB北海道への就職で札幌に戻ってからも、ずっと「東北のために何かしなければ」と考えており、機会があれば自分自身が現地に行って何か活動をしたと思っていました。今回支援活動に参加することができ、やっと現地での支援活動をすることができました。

私自身、被災地での復興支援ボランティア活動をするのは初めてで、震災から5年経過した今もやることはあるのか、わざわざ遠方から現地に行くことが必要なのか、募金の方が現地のためになるのではないかなど不安や疑問を抱きましたが、この不安や疑問は福島に行けばきっと解決する、とも思っていました。

## 2. 活動内容について

### ○1日目：5月21日(土)

1日目、「南相馬市ボランティア活動センター」では、東京からの他の企業の団体や東京都や新潟県からの団体、個人の参加者など、合計140名ほどがボランティア活動に参加していました。

1日目の作業は、JTB 労組チームは南相馬市小高区の雪で潰れたビニールハウスの解体と撤去が割り当てられました。活動内容は、ビニールハウス回りと内部の草刈り、残っているビニールの撤去、ハウス内部の残っているプランターや畑の枠の撤去、ハウスの骨組みの解体、地中の基礎掘り起こし、ビニールや鉄くずの撤去、整地という内容です。26名全員で一つのビニールハウスを解体するのに、4時間半ほどかかりました。

午後、整地作業中のところに、ご依頼者であるビニールハウスの持ち主の方がわざわざお礼に来てくれました。高齢の夫婦で、とても自分達だけではビニールハウスを解体できるようには思



(写真：センター内に掲示されていたビニールハウス解体手順)

えず、自分が福島まで来て作業をした意味を感じることができました。さらに、作業を終えてボランティア活動センターに戻ったあと、ご依頼者ご夫婦からキュウリの浅漬けと南相馬市のお餅の差し入れを頂きました。とてもおいしいキュウリで、今回解体したビニールハウスの場所には新たなビニールハウスが建てられ、こんなおいしいキュウリが作られるということに気がきました。頂いたキュウリは、作業の成果そのものだったと思います。「若い自分達は力仕事でビニールハウスを片付けることができる」、「ご依頼者ご夫婦は美味しいキュウリを作ることができる」というそれぞれのできる事が、ボランティア活動センターに掲示されている「できる人が、できる時に、できる事をする」というお互いの助け合いの心を感じることができました。



(写真：骨組みの解体作業中)

中央部の屋根が雪で潰れ、再利用できないため解体する事になりました。



(写真：作業途中の休憩)

写真下にまとめた骨組みは、左のトラックに積んでセンターに持ち帰ります。

## ○2日目：5月22日(日)

2日目は1日目と違い、南相馬市北部の鹿島区の仮設住宅へのチラシ配布及び御用聞きを行いました。活動内容は、避難区域ではない鹿島区に建てられた仮設住宅で避難生活をしている約900世帯の小高区の住民を対象に、①南相馬市ボランティア活動センターが平成27年4月に移転したことをお知らせする、②避難区域の制限が解除された際は、解除後に小高区に帰宅するための準備として引越の手伝いや小高区の家やビニールハウス、竹林などの片付けのニーズを聞き取る、というものでした。

仮設住宅は一つの住宅群に数十から200戸ほどが建てられており、1日目に小高地区で見た現在ほだれも住んでいない立派な瓦屋根の住宅とは比べられないほど狭く、隣の住宅と密集していました。既に5年が経過しているので実際に一軒一軒訪問すると、退去して空き家になっている部屋が多数ありました。訪問して話を聞いた方々の中には、現在の仮設住宅での生活は楽しく5年間はあっという間だったということをお話す高齢者の方もいましたが、よく話を聞くと地震以前は子どもや孫と同居していたのに震災後は離れて生活しており、震災前と震災後の仮設住宅での暮らしとは、全く違うもので、とても比較できるものではないと感じました。

今回の復興支援活動は、力仕事ばかりで、被



(写真：チラシ配りをした仮設住宅)

駐車場にも空きが目立っていました。

災者の方々と話をする機会はないものだろうと思っていたので、仮説住宅へのチラシ配布作業は被災した方々から直接話を聞くことができたので、貴重な経験になりました。

### 3. 今回の活動を通じて

今回の活動に参加する前は、今年で震災から5年が経過し、既に復興支援をすることは残されていないのではないかと考えていました。しかし、実際の小高区は、町中心部やボランティア活動センター周辺はきれいになっているところも多かったのですが、人はほとんど歩いておらず、建設業者の作業員やボランティアスタッフなどの姿しか見当たらず、きれいな町から住民だけがなくなったような不思議な雰囲気でした。さらに、中心部から少し離れると、竹藪の伐採やビニールハウスの整備などの作業はたくさん残っており、元通りになるにはまだまだ時間がかかるということがわかりました。今後予定されている夜間の避難指定が解除され、住民が戻って来られるようになったあと、さらに復興支援活動が必要になると思います。

ボランティア活動センターに掲示されている「できる人が、できる時に、できる事をする」という言葉について、1日目の朝に見たときにはあまり深くは考えませんでした。2日目の作業終了後にこの言葉を見たときには、「自分が今回福島に来て活動したことは、南相馬市の方々にとって良いことだったんだ」、「来て良かった」と思い、良い言葉だと思いました。同時に、参加前に感じていた不安や疑問は、1日目に解体したビニールハウス解体のご依頼者夫婦や仮説住宅に住むご高齢の住人の方にお会いしたことで、すっきり解決できたと思います。

また、今回の復興支援活動を通じて、メディアを通して選定された情報ではない生の福島県南相馬市の状況を、自分の目でみて、自分で作業を行って肌で感じることができました。このことで、自分が携わっている旅行業・交流文化事業は「現地に行って、現物を自分の目で見て感じるということだ」ということを改めて考える機会となりました。本当に参加して良かったと思います。



(写真：南相馬市ボランティア活動センターの前で集合写真)